

白菜はくさいといえば冬を代表する野菜ですが、日本には明治時代に入はいって来きました。白菜は中国ちゆうごくが原産地げんさんちで、明治8(1875)年に東京の博覧会はくらんかいで展示てんじされた山東白菜さんとうはくさいを愛知県植物園あいちけんしやうぶつえんがゆずり受けて栽培さいばいしたのが日本での栽培の始まりです。ところが、栽培した白菜は葉が開いたままで、ほとんど結球せず、しんまで日ひにあたってしまい、色も緑色みどりいろでした。

そこで、明治18(1885)年に、愛知郡大蠋螂村あいちぐんだいとつろうむら (現在のなかがわくだいとつろう) のさきとくしろげんざい中川区大当郎たね(の野崎徳四郎)1850年～1933年)が植物園から種たねをもらい受け、品種改良ひんしゆかいりょうを続けました。10年間、根気こんきよく取り組みを重ねた結果、明治28(1895)年、45歳の時ときにとうとう日本で初めての結球白菜たんじやうを誕生させることが出来できました。この白菜を「野崎白菜二号」と言いいます。温暖おんだんな地方てきでの栽培やわに適てきし、軟らかく甘みがあるのが特徴です。その後、周辺町村しゆへんちゆうそんに栽培を拡大かくだいし、生産せいさんも増えていきました。大正6(1917)年には、愛知県農事試験場あいちけんのうじしけんじやうが結球白菜を「愛知白菜」と名づけました。現在、あいち「野崎白菜二号」は「愛知の伝統野菜でんとうやさい」に選ばれており、区内の野崎採種場のやまてうめいじやうが種作りに取り組んでいいます。

【参考資料】『すくんでいてもはじまらない』(KTC中央出版)、『愛知に輝く人々4』(愛知県教育振興会)、『ハクサイの絵本』(農山漁村文化協会)